



黒羽入りする日、後を慕ってついてきた「かさね」という少女の純情な心を詠んでいます。

3 かさねとは八重撫子の名成べし

— 曾良 —



「秣を背負う農夫を道しるべとしてやって来ましたよ」というあいさつの句で草深い那須の情景を詠んだ句です。

4 秣負ふ人を枝折の夏野哉

— 芭蕉 —



余瀬で催された歌仙の中の一句で、「石の上に立って今日も朝日を拝む行者の姿」を詠んだものです。

5 今日も又朝日を拝む石の上

— 歌仙より・芭蕉 —



今眺める風景は、秋風の吹く白河の風景と違って風情はないが、夏のほととぎすだけが風情を感じさせてくれる。浄法寺家に滞在した四月七日に詠んだ句です。

8 田や麦や中にも夏のほととぎす

— 芭蕉 —



(絵の中で) 鳴いている鶴よ。その声によって、(同じ絵の中の) 芭蕉の葉も破り散ってしまうでしょう。浄法寺邸において、鶴の絵をほめる「讃」として詠んだ句です。

9 鶴鳴くや其声に芭蕉やれぬべし

— 芭蕉 —



尊敬する仏頂和尚の山居跡を訪ねたときの句です。「和尚の徳の前にきつきささも敬意を払っている」というユーモラスな視点が光ります。

10 木啄も庵は破らず夏木立

— 芭蕉 —